
Seven Fighters

corplash

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Seven Fighters

【Nコード】

N7583X

【作者名】

corplash

【あらすじ】

七賢人——。それは、この桜ヶ丘の中枢部を形作る隠れた者たち。

眠れる二頭獅子、ファイバースパイ、惑いの青蝶、企業の統率者、汚物の清掃人、そして、黄眼の忍び屋。

この七賢人たちが起こされたと言われる、伝説の一夜は、いまだに忘れられることはないだろう。そう、あの土曜日の夜の祭りのことは——。

原作とは全く設定が違います。キャラ崩壊などに抵抗のある方は、
バックすることをおすすめします。

#1 「その者たち、何者」

とある日曜日。彼女たちは桜ヶ丘の外れにある、とある大きな屋敷に足を運んだ。風格のある作りと、純和風の引き戸。そこをくぐると、めいっぱいの舎弟たちが声を上げる。

「お帰りなさいやし！ お嬢！！」

「うん、ただいま」

そう言って引き戸をくぐるのは、桜ヶ丘女子高等学校3年、軽音楽部所属の平沢 唯。

「憂は帰ってきてる？」

「へい！ 憂お嬢は5分ほど前に帰宅され、今は買出しに」

「そう、分かった」

「それより、お嬢」

「ん？」

「先程、親っさんが呼んでましたぜ」

「おじいちゃんが？」

「へえ…。親っさんいわく、話があるとか……」

「そう…。私、着替えるね」

「へい！ 失礼しやした！」

外に出たのを確認して、私は黒地に花柄をまとった和服に着替えた。そしておじいちゃんの待つ和室へ。

「おじいちゃん…」

「おお、唯か。入りなさい」

「失礼します」

引き戸を引いて中に入ると、紺色の浴衣を着てあぐらをかいているおじいちゃんと目が合う。そう、私のおじいちゃんの職業は……

極道なのです。

そして私は、おじいちゃん率いる平沢組の末子。そして憂も末子。

「タカから聞いたか…？」

「いえ、ただ話があると…」

「うむ、そうか…」

「はい。で、その話というのは…？」

「うむ…。唯は、山中組を知つとるか？」

「ああ、祭りの後から妙に動かなくなった…。」

「うむ。その山中組が、ついに再始動を始めたらしい」

「はあ…」

「山中組は、わしら平沢組とは唯一敵対する族じゃ。外回りの時には、十分気をつけよ」

「はい」

「お、そうそう。この件、憂にも伝えておいてくれ」

「御意」

そう言うのと、私はおじいちゃんのいる間から足を退けた。もうそろそろ、憂が帰ってきているのではないだろうか。私はおじいちゃんの御座から退いたあと、自室に戻る途中にある台所を覗いた。

「あ、お姉ちゃん帰ってたの？ おかえり」

「うん。ただいま」

ほらね。

「あ、そうそう。おじいちゃんがね…」

◇—◇—◇

私が家に帰って一番最初にすると言えば、ノートパソコンを起動させることだ。

A・M・ I n f o r m a t i o n C e n t e r

そう表示されているページから、パスワードを入力して、管理人ペ

ージに飛ぶ。

A・M・Information Centerとは、私…も
とい秋山 濤が開いている、情報交換サイトだ。

管理人である私は、A・M・I・Cと略している。通称『アミツ
ク』。

このサイトはユーザー制で、利用するには会員登録が必要だ。ユーザーそれぞれにアルファベットと数字を織り交ぜた5桁のパスワードが配布されていて、そのパスワードを用いてアミツを利用することができる。主な利用方法は、掲示板とチャット。ニュースで取り上げられている事柄から身の回りの小さな出来事まで様々だ。管理人である私の携帯電話には、掲示板の記事に更新情報があるたびにそれが通知されるシステムだ。最初は少なかった会員も、今となつては50万を超すマンモスサイトだ。

「はあ…。今日も興味のある記事はないなあ…」
そうつぶやいて、私はパソコンの電源を落とした。

◇ー◇ー◇

「ただいまー」

「おかえりー、姉ちゃん」

「あ、悪い聡。ちょっと出かけてくるわ」

私の名前は、田井中 律。桜ヶ丘女子高等学校に通う、軽音楽部所属のドラム担当。帰ってきたのはいいけれど、私はさっそくいかなければいけないところがある。

「今日もなのか？」

「ああ。悪いけど飯頼むわ」

「分かった」

聡の返事を最後まで聞かず、私は自室に着替えに入った。

白い生地に赤い刺繍で『恩那組』の文字。『おんなぐみ』と読む。これは私が着ている特攻服。そう。

私は恩那組の今季総長であり、初代総長であり、恩那組は関東を統一したはじめてのレディース。私は桜ヶ丘神社の境内に急いだ。



「姐さん！」

「おう」

「姐さん、チッス！」

「おう」

私が挨拶したこの2人は、恩那組の幹部。いわば中核をなす2人だ。名は、今井 いまい 薫と藤崎 ふじさき 楓 かえで。私の忠実な部下だ。

「姉さん、今日の総会は？」

「ああ。ある情報をつかんだんだな。そのことについてちょっと」

「ある情報？」

「ああ。」

「私ら以外の七賢人 しちけんじん についてだ」

「！！！！」

2人ともハツとした顔つきをした。こいつらはいつ見ても飽きない。

「だから、総会での情報は内密に頼む」

「…はい」

「了解です…」

そう。私の組織するレディースは、ただの不良のあつまりではない。社会情勢も事細かに調べるスパイでもあるのだ。



「そして我が社のプロデュースする製品は……」

私は琴吹 紬。桜ヶ丘女子高等学校に通う、女子高生。そして、世界の3／4を掌握する琴吹コーポレーションの社長令嬢。

私は今、会社が契約している子会社の新製品についての会議に出

席中。正直、つまらない。

(……この製品、当たらないわね。正直何言ってるかわからないし、用途が見当たらない……。捨て……ね)

ガタンッ

「!!」

「ど……どうされました？」

「我が社は、この製品を取り扱うことはできません」

「?! ……な、なぜ今更そのような」

「貴社の開発するその新製品には、メリットが見当たりませんわ。それに、その製品は既に我が社が開発したものの模倣品。今までの説明を聞く限りでは、まだ我が社の製品の方が優れていると思いますが」

「っ……しかし、我が社の製品は軽量化に成功しており……」

「その代償として性能が下がっているのでは？ 性能がそのままに、軽量化に成功したなら我が社も考えましたが……。プラマイゼロなら、扱う必要はありませんわ。斉藤」

「はっ」

「お父様に連絡して。帰るわよ」

「御意」



「ねえ、斉藤」

「なんでしょうか、お嬢様」

「私はこのままでいいのかしら？」

「と、いいえと？」

「私は確かに琴吹コーポレーションの社長令嬢だわ。でも、現社長はお父様なのだから、私に任されるのは荷が重い気がするの」

「ですがお嬢様。あなたの予想は今まで外れたことはございません。心配なされなくとも、大丈夫でございます」

「本当にそうかしら…」

「はい」

「そう…（………：退屈だわ）」

◇—◇—◇

私は今、商店街にいる。買い物のためではない。喧嘩を売るためだ。

ドンッ

「おい、姉ちゃん。謝れよ」

「……」

「謝れっつってんだろ！」グイッ

ガシッ

「！……！！」

「…ぶつかってきたのはそっちでしょう」

「何い！？ どういう意味だ！」

「そのまんまの意味ですよ……」ギリギリ

「い…いてててて！！」

「まったく…。自分の罪を認めないなんて……」

「う…うるせえ！」ブオンッ スカッ

「ふう…。弱いんですね…」

「やかましい！！」ブオンッ スカッ

「当たってませんよ？」

「くそっ！ くそっ！ くそっ！！」ブオンッ ブオンッ ブオン

ッ スカッ スカッ スカッ

「野郎…ちょこまかと動きやがって…」

「あなたが遅いんですよ…」 シュッ

「ぐっ…」 バキッ

「こんなことでムキになって…」 ドカッ

「ぐああ…」 バタ…

「…恥ずかしいんですかねえ…」

掃除、完了。キャップを深くかぶり直し、大きなため息を一つつく。

「ま…待て…」

「…まだ何か？」

「お前…七賢人か？」

「…私は名乗る主義ではないのですが」

「ち、違うのか…？」

「…汚物の清掃人…と言った所でしょうか」

「お前、やっぱり…」

「ええ…」

「七賢人の1人ですよ？」 ニヤ

#2 「過去の大事件」

七賢人。それは、この桜ヶ丘の中枢部を形作る隠れた者たち。

眠れる二頭獅子ケンタウロス、ファイバースパイ、惑いの青蝶モルフォン、企業の統率者、汚物の清掃人、そして、黄眼の忍び屋。

この七賢人たちが起したとされる伝説の一夜は、いまだに忘れられることはないだろう。そう、あの土曜日の夜の祭りのことは――

サタデーナイトファイバー
土曜日の夜の祭り――。

その名のとおり、事件が起きたのは土曜日の夜だった。

裏社会のドンと言われた平沢組は、概ね法律に触れてしまう方法で活動資金は得ていない。七賢人の1人である企業の統率者：もと琴吹 紬嬢の手助けの下、(株)Hirasawa System Company、略してH・S・C.を立ち上げ、IT関係の会社を成長させてきた。会社を続けるにあたっては、ほかの会社の新製品や優品を仕入れなければならないのだが、H・S・C.は琴吹コーポレーションの管轄。製品を導入するかどうかは、紬嬢の判断に任せてあったのだ。

そしてある時、紬嬢はとある製品の導入を拒否。それはH・S・C.にとっては利益であった。しかし製品を作った側からすれば、それは害悪でしかなかったのだ。さらにその製品を作った子会社は、平沢組に唯一反発するヤクザ、山中組の傘下であり、山中組の管轄だったのである。

会社の恨みを買った琴吹コーポレーションは、対策のために警備を強化。しかし、連絡を受けたのであろう山中組は琴吹コーポレーションを襲撃。その噂を聞きつけた平沢組は、恩人である琴吹コーポレーションを助けるために動いた。その際最も異を放っていたのは、平沢組の末子であり、眠れる二頭獅子ケンタウロスである平沢 唯とその妹、

憂であつた。

「オヤジさん、狙うところ間違えてない？」

「そうかい？　こちらら借金を抱えちまったんだ。これくらいの損害は覚悟してもらわないとな」

「損害？　覚悟？　…笑わせるねえ」

「この琴吹コーポレーションの敷地は、恩人といえど平沢組のシマ…。何人の領地に土足で踏み上がってんの？」

「そうですよ。玄関を上がる時には靴を脱ぐ。これは日本の常識です。それでも泥を塗ろうというなら、私たちが黙っていない…。」

「へっ！　二頭獅子かなんだか知らねえが、ワシは負けんぞ！！」

野郎ども！　行けええ！！！！」

オスッ！！！！！

オラアアアアア

100を超える山中組の舎弟を前に、次々と捉えた獲物を仕留めていく2頭の獅子。仕留められた獲物は、そこらじゅうに積み重なっている。そのうち、紬嬢を狙うモノがいた。

「その首もらったああ！！！」

「お嬢様！　お下がりください！！！」

「斉藤！！！！」

その男がもっていた太刀が、紬嬢の執事、もとい斉藤の頭上に、刃物が振りかざされた。

「斉藤——！！！」

紬の顔に絶望の色が見えたその時だった。

ガシッ

「！！！」

「紬お嬢の身内に手を出そうなんぞ……大した頭してるねえ……！！！」

ガスッ グワアアアアアア！！！！

「さあ、早く逃げて！！」

「で、でも！！」

「いいから！ ここは私たちに任せて……！！」

「末子殿の言うとおりでございます！ お嬢様、お早く！」

「……分かったわ！ いそいで！！」

「御意……！」

紬が斎藤に抱えられて車に逃げる間も、あの二頭獅子は容赦なく獲物を噛み切っていた。そう、その姿はまるで、獲物を捉えた百獣の王そのもの。

「斎藤……」

「はっ……」

「今私が見てるのは、錯覚かしら……」

「いえ。私もこの目でしかと、見届けております」

「あなたにも見えるのね……？」

「はい。私にもしっかり見えております。眠れる二頭獅子が――」

資料によって残っているのはこの部分のみで、他のファイバースパイや惑いの青蝶、汚物の清掃人、黄眼の忍び屋がどのように関与し、どのように暗躍していたのかは定かではない。ただ、七賢人全体が引き起こした事件という記述のみが残っており、これはいうなれば『桜が丘闇の伝説』なのであった。

#3 「信頼するところ」

祭りがあった当時から、唯と憂はとある情報屋を行きつけとして利用していた。その名も『N・M・Farm』。様々な資料が棚に整頓されており、社員は社長が信じる1人のみ。

「またいらしたんですか、末子殿」

鈴木 純である。

「私たちが一番信じてる情報屋だからね」

「それはそれは。嬉しいですね」

そう言って純は、コーヒーを差し出した。唯や憂が最も信用している、情報の多さと正確さが売りのスパイ。スパイとは言っても、人を殺すわけではない。

この会社の所有者は、情報を集めるだけ集め、その情報を利用して七賢人までも手のひらで踊らすほどの悪徳……いや、利己的な人物。

「……って紹介したらよかったかな？」

なんとも言えない絶妙な笑顔をこちらにむける唯。何を企んでるのか一向にわからない。

「――和ちゃん」

その柔らかな声に、一瞬蕩けそうになるも、なんとか持ちこたえる。

「別に手のひらで躍らせてるわけじゃないわよ。ただ、コマの動きを観察しているだけ……」

その言葉を聞いてもなお、唯はただただ笑顔でいるばかりだ。

「それはそうと、例の情報は何？」

「例……？ ああ、七賢人ね」

「うん。存在は知ってたけど、詳しいところまではわからないんだよ」

「七賢人って言うからには、7人いるんですか？」

「そうよ。詳しくはこの書類を見て頂戴」

和はそう言うと、机上に資料を並べた。

「これは…」

「そう。七賢人をまとめてみたわ。祭りの直後から、七賢人の存在が顕著になってきたから、調べることに关してはそこまで苦劳しなかったわ」

「いって差し出す大量の資料。さすがは和といったところである。」

「まずは貴方たち。眠れる二頭獅子よ。裏社会…もとい族社会のドンと言われる平沢組の末子。これで2人ね」

「あとの5人は？」

「3人目は、ファイバースパイよ」

「ファイバースパイ？」

「インターネットの情報網を利用して、世間の情報を集めるの。インターネットのみならず、身近な情報もチャットで交換できるようになっているわ。文明の力を利用した情報収集ゆえの正確さは、常軌を逸するものがあるわね。ま、私の情報はすべて独自のものだけどね」

その独自の情報でこの正確さ。それゆえに唯たちはこのN・M・F armを利用している。

「そして4人目は、惑いの青蝶」

「おお…なんかカッコいい」

「中学校卒業と同時に、関東全域を統一した伝説のレディース、『恩那組』の総長よ」

「『恩那組』…？ ああ、あの子ね」

唯が軽く含み笑いをしながら言う。

「お姉ちゃん、知ってるの？」

「うん、まあね…」

「5人目は、企業の統率者。これはあなたたちも知っているでしょう？」

「うん、ムギちゃんだよね？」

「そうよ。そして6人目は、汚物の清掃人。不良を見つけ次第、有

無を言わず暴力で撃退する七賢人の1人。そして最後の7人目は、黄眼の忍び屋…」

急に和の顔が曇る。

「これについては、まだ残念ながら分からないの」

「どうして？」

「忍び屋というだけあって、分かっていることが少なすぎるのよ」

「ふん…」

「でも、その七賢人がなぜ…？」

「それはねー」

コーヒーをすすったあと、和ちゃんは静かに口を開いた。

「これが関係していたのよ」

そうやって指を指したのは、企業の統率者を示すチェスのクイーンの白駒。

「ムギちゃん？」

「紬さんが、どうかしたんですか？」

「ムギは他会社の製品の採用を断ったの。でもその製品を作ったのは、山中組の子会社だったわけ。琴吹コーポレーションを逆恨みして、貴社を襲撃。そこから祭りにつながったのよ」

「なるほどねえ…。で、七賢人が誰なのかはまだわかってないの？」

「残念ながら、埋まっているのは眠れる二頭獅子と企業の統率者だけよ」

「私たちと、紬さん…ってことですよね？」

「ええ」

「もっとも、貴方たちは祭りに関わっていたし、ムギもその1人だから…。あとの枠が誰を占めるのかは、まだ分かってないわ」

「そっかあ…。でも、貴重な情報ありがとね。今回はいくら？ その情報」

「お代はいいわ。私が興味本位で調べたことを言っただけだし」

「そっか…。ありがとね」

唯はとびきりの笑顔を振りまき、N・M・Farmを後にした。

「よかったですか？」

「何が？」

「あんな貴重な情報漏らしちゃって」

「唯と憂は仮にも裏社会のドンよ。こんな滅多に手に入らない情報を提供しなかったら、今度は私が食い殺されちゃうわ」

「なるほど…」

純は和が飲み終えたコーヒーカップを下げると、軽食に、とパンケーキを差し出した。純はコーヒーカップを片付けに、ダイニングキッチンへ向かった。

「本当に純ちゃんはいろやってくれるわね」

「私の忠実な駒……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7583x/>

Seven Fighters

2011年10月20日22時38分発行